

2015年（第50回）ASHPミッドイヤー臨床薬学会議報告

九州大学病院薬剤部

秦 晃二郎 Kojiro HATA

はじめに

米国ヘルスシステム薬剤師会（the American society of health-system pharmacists: 以下, ASHP）の第50回ASHPミッドイヤー臨床薬学会議が2015年12月6～10日にかけて米国ルイジアナ州ニューオーリンズのConvention Centerで開催された。今回、私は日本病院薬剤師会からの助成を受け、ゾレドロン酸誘発性の腎障害にかかわるリスク因子解析を発表するため本会議に参加する機会を得たので報告する。

写真（左：著者、右：九州大学病院 池末 裕明氏）



ASHPミッドイヤー臨床薬学会議について

第1回ASHPミッドイヤー臨床薬学会議は、1966年ワシントンD.C.で開催され、今回で50回目の節目を迎えた。開催当初は250名程度の参加者であったが、現在では米国だけでなく欧州やアジア各国から20,000名を超す薬剤師、薬学生、テクニシャンで会場は溢れていた。本会議は、特別講演、グループワーク、シンポジウム、口頭・ポスター発表、企業展示、薬学生やレジデントのためのRecidency Showcaseなどが同時進行で開催されていた。オープニングセッションでは、John A. Armitstead会長は、レジデントの研修機会やレジデントの教育者、専門薬剤師等を支持することで薬剤師職能を高めることが、ASHPの重要な仕事であると表明していた。また、特別ゲストとして、George W. Bush前大統領夫妻が登場し、8年間の大統領就任時の苦労した点についてインタビューされ、サテライト会場を設けるなど会場を大いに賑わせていた。

Recidency Showcase（卒後教育研修プログラム）

米国病院薬剤師の多くは2年間の卒後教育研修プログラムを受ける。Recidency Showcaseでは大学卒業を控えた薬学生や2年目の研修を希望するレジデントたちが、866施設の1,627研修プログラムについて情報収集・交換を熱心に行っていた。また、教育研修を終了した薬剤師やキャリアアップ等で転職を希望する薬剤師のためpersonnel placement service (PPS) という場が設けられており、自身の薬剤師キャリアを真剣に考えているのがとても印象的であった。

Continuing Education Program (生涯教育プログラム)

米国では薬剤師免許の更新制度があり、薬剤師教育認証審議会 (accreditation council for pharmacy education: ACPE) の認証を受けた生涯教育プログラム (continuing education program: 以下, CE) を受講して、更新に必要なCE単位 (2年間で30時間程度) を取得する必要がある。そのため、本会議においても、がん領域、感染症領域、糖尿病領域、循環器領域など様々な領域の教育セッションが設けられており、薬剤師免許の更新や専門薬剤師の申請・更新に必要な単位を受講者が選択できるようになっていた。教育プログラムの難易度は General Interest, Intermediate, Advanced の3段階に分かれており、受講者のレベルに応じて聴講できる仕組みになっていた。また、教育セッションのほとんどの講演資料は、ASHPの専用アプリケーションから事前にダウンロードすることが可能であり、参加者のほとんどは、スマートフォンやタブレット等を見ながら聴講していた。日本の学会において講演資料は、ほとんど紙であることが多いため、インターネットのインフラが整っている現在では参考になる仕組みだと感じた。

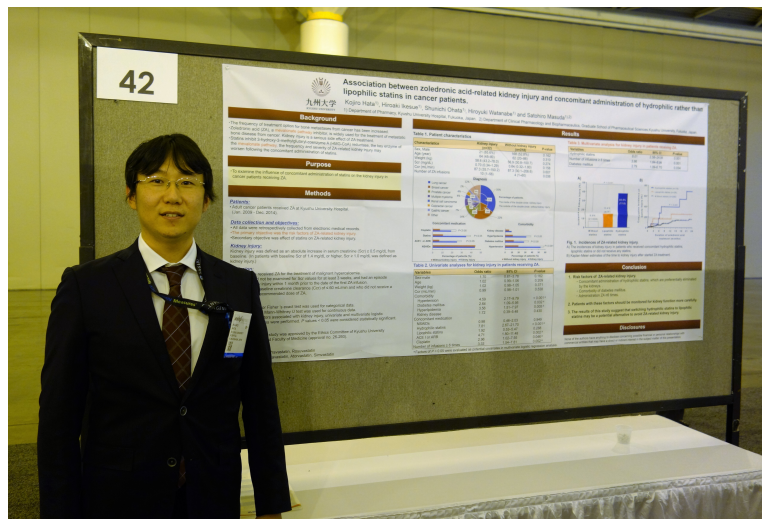
教育セッション・シンポジウム

大会5日間で教育セッションは、様々な領域で開催されていたが、私が参加した「Oncology Pharmacy Specialty Sessions 2015」というセッションでは、血液／腫瘍薬学会 (Hematology/Oncology Pharmacy Association: HOPA) と共同開催でがん専門薬剤師を取得するのに必要な単位が得られるセッションであった。そのなかで米国MD Anderson Cancer Center所属のRina Patel氏の「Nutrition in Cancer」の講演では、がん悪液質に関する薬物療法の紹介がされた。がん悪液質は、がんの進行による慢性炎症状態からサイトカインによる脂質異常、筋肉萎縮を引き起こし、嚥下障害による誤嚥性肺炎で死を招くことがある。薬物療法として、メゲストロールやコルチコステロイド等のエビデンスを交えながら対処法を説明していただいた。日本では、がん悪液質に対する情報や支持療法についての教育セミナーが開催されることは少ないため、がん患者の栄養面をサポートするうえで、今後興味深い領域と思われた。

その他シンポジウムでは、「Expanding Horizons in Immuno-Oncology: Health-System Pharmacists' Perspectives」に参加したが、悪性黒色腫や非小細胞肺癌に対するPD-1/PD-L1抗体療法のエビデンスや副作用管理についての内容であった。特に副作用管理については、従来の抗がん薬の対処法とは異なるため、甲状腺機能や消化管障害や肺障害等が出現していないかを経時的に確認し、副作用を疑う症状が出現した場合には、ステロイドによる初期治療が重要であることを説明していた。日本においてもニボルマブの使用が非小細胞肺癌に適応が拡大したことで、患者が安全に治療を継続するためには適切な副作用管理の体制が重要になると考えられた。

ポスター発表

ASHPのポスター発表は、Student, Resident, Professional/Fellowsの3つの部門に分かれており、それぞれの立場で討論が行いやすい工夫がなされていた。発表演題数は、Student1,880題, Resident2,018題, Fellow51題, Professional374題で総演題数4,323題であった。Professional部門では、発表演題433演題中、採択374



演題（86%）で、約15%の演題がリジェクトされていた。今回から採択演題のなかで、先進的なものや興味深い演題についてハイライト発表として61演題が選出された。発表形式は、日本と同様で発表者は規定時間帯にポスターの前に立ち、参加者からの質問に対応する。主な発表内容は、臨床薬剤業務の介入成果や医療費削減効果、レジデントの教育プログラム等であり、会場内で積極的に討論が行われていた。また、自身の発表について聴講者がいない場合でも、隣接する発表者のポスター内容について質問し、少しでも情報交換をしようとしているのが印象的であった。

ポスター発表のなかで内容が優れた6題については、ASHP Best Practices Awardとして、別会場にて発表および表彰が行われた。そのなかで、米国 University of North Carolina Medical Center 所属、Benyam Muluneh氏の「Impact of an Integrated, Closed-loop, Pharmacy-led Oral Chemotherapy Program on Clinical and Financial Outcomes」では、経口抗がん薬を開始する患者に治療内容や副作用などの教育を行い、継続的なアドヒアランスの確認や自宅での副作用発現状況や支持療法薬の提案などを行う体制を構築していた。特に、慢性骨髄性白血病患者におけるチロシンキナーゼ阻害薬のアドヒアランスが向上し、治療成績が過去の臨床試験と比較して優れていることを報告しており、素晴らしい取り組みの紹介であった。

私は、ハイライト発表で「Association between zoledronic acid-related kidney injury and concomitant administration of hydrophilic rather than lipophilic statins in cancer patients」という演題で、ゾレドロン酸誘発性の腎障害に対するスタチン併用投与の影響について発表した。会場からの質問では、スタチンは日常診療のなかで幅広く使用されている薬剤であるため、相互作用により副作用が増悪する報告は重要であるとの意見をいただいた。今回、初めて国際学会でポスター発表を行ったが、海外の薬剤師と臨床研究について議論することで、海外でも共通の問題点を抱えていることを認識でき、貴重な経験を積むことができた。

おわりに

今回の参加を通じて米国薬剤師の教育研修制度、キャリアアップや臨床業務・研究への取り組みについて学ぶ良い機会となった。教育セッションでは、Clinical Questionと回答の選択肢を提示し、会場内の参加者に積極的に参加してもらう工夫をしていた。日本の学会ではあまり見かけないが、グループワークでは、臨床で経験する問題について各施設の取り組みや解決策について討論を展開していた。学会という多くの薬剤師や薬学生が集う場を利用し、共通の問題点について議論することで効率的な情報共有が可能ではないかと思われた。

また、日常業務の傍ら臨床研究に取り組んだ成果を国際学会で発表することで、日本の薬剤師がどのような研究・取り組みを行っているかを海外に発信する良い経験につながると考える。2016年は12月4～8日にかけてラスベガスで開催予定であり、日本病院薬剤師会の会員がこのような機会を積極的に活用することで、国際交流に拍車をかけることを切に願う。

謝 辞

最後になりましたが、今回大変貴重な機会を与えて下さいました日本病院薬剤師会 北田光一会長、国際交流委員会 折井孝男委員長をはじめ関係各位に厚く御礼申し上げます。また、今回の発表を支援して下さいました九州大学病院薬剤部の皆様方に感謝致します。